

## 48. 慢性硬膜下血腫症例の灌流脳シンチグラフィー

恵谷 秀紀 井坂 吉成 津田 能康  
木村 和文 中村 雅一 浅井 勉  
米田正太郎 松本 昌泰 (阪大中放・1内)

虚血性脳血管障害が疑われ  $^{99m}\text{Tc}$  標識人血清 アルブミンマイクロスフェア (HAM) を用いた灌流脳シンチグラフィーにて、偶然慢性硬膜下血腫を診断しえた症例を経験したので報告する。

症例：61歳女性、主訴：右半身不全マヒ、現病歴：2月4日に左半身不全マヒに気づき同時に頭痛を伴っていた。その後2～3日で症状はほとんど軽快した。TIAの疑いにて精査のため入院。

灌流脳シンチグラフィーを施行5mCiの $^{99m}\text{Tc}$ -HAM(約80,000個、径15 $\mu\text{m}$ )を右総頸動脈に注入した。シンチグラム上、前面、後面にて両凸状のunperfused areaを認め、右側面にて頭頂から後頭部にかけてhypoperfused areaを認めた。CTでは右側脳室の圧排、脳溝の消失を認めisodensityの血腫が疑われた。

手術にて硬膜下腔より約200mlの茶褐色の液を吸出した。

灌流脳シンチグラフィーは直接unperfused areaを証明出来、一部血管造影の代用にもなりうるであろうが、有用性に関してはさらに検討が必要であろう。

49. 新しい腫瘍シンチ製剤  $^{99m}\text{Tc}$  (V)-Dimercaptosuccinic acid (Tc (V)-DMS) による軟部組織腫瘍の診断

太田 仁八 阪原 晴海 中島 鉄夫  
遠藤 啓吾 森田 陸司 鳥塚 莞爾  
(京大・放核)  
琴浦 良彦 (同・整形)  
池窪 勝治 (神市民・核)  
井上 紀彦 田村 清 (同・整形)

新しく開発された腫瘍イメージング製剤 Tc(V)-DMS が軟部組織腫瘍の診断・治療効果の判定に有用であったので報告する。Tc(V)-DMS は pH 8.0、限定され塩化第1スズの濃度範囲において、単一な5価の Tc 錯体と考えられている。臨床的に悪性18例、良性23例の計41例の軟部組織腫瘍について Tc(V)-DMS 10 mCi 静注後2時間のシンチグラムを、一部は Ga-67 と比較した。

悪性腫瘍では Ga-67 の検出率 60% に比べ、17例(94%) が陽性であった。neurogenic sarcoma, extra-abdominal desmoid tumor の検出率が特にすぐれており、desmoid tumor では Ga-67 の検出率は5例中1例であったが、Tc(V)-DMS では全例とも陽性であり、ECTを行った例では、X線CT像と Tc(V)-DMS の集積像はよく一致した。

良性腫瘍では Ga-67 の 14% に対し6例(26%)に偽陽性をみとめたが炎症巣へのとりこみは Ga-67 に比較して軽度またはみとめられなかった。Tc(V)-DMS の腫瘍集積機序は現在研究中であるが、軟部組織腫瘍の診断に Tc(V)-DMS は有効で、Ga-67 よりも優れていると考えられる。

## 50. 新しい腫瘍マーカー tissue polypeptide antigen (TPA)：消化器系悪性腫瘍における臨床的有用性の検討

阪原 晴海 中島 言子 中島 鉄夫  
太田 仁八 遠藤 啓吾 鳥塚 莞爾

(京大・放核)

最近注目されてきた新しい腫瘍マーカー tissue polypeptide antigen (TPA) の血中濃度を RIA を用いて測定し、基礎的検討を行うとともに消化器系悪性腫瘍について臨床的有用性を検討した。

使用した RIA キットは精度、再現性、希釈試験、回収試験などでは満足すべき結果が得られ、CEA, AFP などの他の腫瘍マーカーとの交叉反応もみられず、臨床検査法として十分使用に耐えるものであった。

対象は消化器疾患で手術にて診断の確定した悪性腫瘍症例87例、良性疾患症例133例、および正常対照84例である。正常対照群の血中濃度は  $52.3 \pm 24.4$  U/L であり 100 U/L を正常上限値とした。

悪性腫瘍における陽性率は胃癌 22/32 (69%)、大腸癌 15/26 (58%)、膵癌 7/7 (100%)、肝癌 12/13 (92%)、食道癌 8/9 (89%) であったが、胃潰瘍その他の良性疾患でもかなり高い陽性率を示した。特に各種肝疾患において血中 TPA 値が高値であった。しかし一方、胃癌、大腸癌では病期の進行とともに個々の値は高くなり、陽性率も増した。また同時に測定した CEA とはあまり強い相関関係は認められなかった。

良性疾患における高い陽性率については正常値の設定を再検討する必要がある、また血中 TPA 濃度の測定の